

さわる・つかむ・えがく・つくる

子供の世界の追体験から教育を再考する

稲賀繁美

読者の皆さんはどうだろう。幼少のころ、描きあげた絵を得意になって親や先生に見せた記憶があるだろう。だが話を聞いてもらえるものと期待していたのに邪慳にあらわれたり、詰らぬ注文を付

けられて落胆したり、はては無理やり描き直されて、もはや金輪際、絵を描くのが嫌になったといった、思い出さずに辛い経験をお持ちの面々も少なくあるまい。本書は、そうした経験が次の世代へと負の循環を重ねることに心を痛めた著者の、親や教師にむけたメッセージ、きわめて良質な配慮に溢れた格好の道しるべといつてよい。

本書が目指すところを三箇に要約しよう。まず子供の感覚を取り戻す努力が、親や教師には求められる。例えば四歳児にとって、手で物に触ることには、掛け替えない価値

がある。猫の毛を撫で、砂場で泥団子を捏ね、知らずに指を伸ばした力マキリに鎌で応戦されて痛い思いをする。そうした触感や痛覚を通過することなくして、はたして情操教育はうまくゆくだろうか。いくら口で説明してみても、体験なき概念では、実感は得られまい。

次は幼児にとって体験とは何なのか。四歳児相手の幼稚園で、園児に玉葱を描かせよとしたクラス的情景が描かれている。幼児たちは玉葱に刺した園児を先生は叱つてしまふ。「絵」を描かせる

ことが授業の目的だから。けれど絵が仕上がることより大切なことがある。玉葱を畠から掘り起こし、皮を剥いて涙を流し、それをお鍋で煮込んで味わう。そこから玉葱のイメージが子供たちのなかに豊かに膨らみ、根付いてゆくのではないか。そこで育まれそこから生まれるのが「表現」ではないか。

第三に、「美術」の再定義。

造形活動とは、完成を目指すものというより、むしろ心身を体験へと「開いてゆく」活動だと著者は述べる。目的地を括弧に括り、制作の試行錯誤に没頭する境地を体験することが大切ではないか。それが「造形遊び」の意義なのに、残念ながら幼稚園や小学校低学年の現場では、その意図が十分には汲み取られていない。教員側からすると、目標が見えず、指導方針に自信が持たず、評価の方法も分からないため、面倒なのだといふ。ここまで来れば、現在の教育現場が抱えている問題点も見えてくる。

造形活動を通して「ちゃん

松岡宏明 著

▼子供の世界 子供の造形

2・1刊 A5判 160頁 本体1700円
三栄社

と子供をする」経験が、今の子供たちからは奪われていく。そう著者は訴える。二歳から七歳の発達過程でその時々大切な経験を子供たちに惜しみなく与えることが、長い目で見れば将来の可能性の芽を育てる土壌となる。ところが目的意識に囚われた早期教育は、ともすれば親や教師の顔色を窺って優等生的な返答を寄こす学童ばかりを高く評価しがちだ。また芸術的表現力に優れた教師は、自分の図式を児童に押し付け、自分の「下請け」にしがちである。だから教師は失敗経験豊かな劣等生のほうが相応しい。とはいえずともたちの絵を「見る力」がなければ、指導はかえってマイナスになる。児童心理学に照らせば、たしかに色彩や線から子供の性格や心理状態を推測することもできる。だが占いのよう

に「当て」てみせることは、およそ教育の目的ではない。子供の絵には「伝えたいもの」と「伝わっているもの」がある。それを見極めるには、それなりの経験があらまほし

い。今や多くの親にとって子育ては一回だけの経験。また兄弟姉妹でも類推が利くとは限らない。さらに幼稚園でも小学校でも、先生方は規則遵守や校務繁忙のあまり、子供たちの「伝えたいもの」を聴き落とし「伝わってく」ものを感知し損ないがちだ。そうした教育の現場を知り尽くした配慮ある反省が、本書には横溢する。

どうして著者にはここまで

の気配り溢れる文章が綴れるのか、と評者は以前から感嘆していた。その秘密は本書冒頭(と表紙)に明かされる。それは著者自身にとっても驚きの、隠されていた幼少体験だった。似たような僥倖を幼少時に得た者のひとりとして、本書が子育て真っ最中のご両親や幼稚園・小学校の先生方に広く読まれることを願ってやまない。良質な絵本と同様、本書は「一家に一冊」備えて随時参照するに値する、「学び直し」指南の名著である。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学)

